

Title	日本の自分史実践における「第二の生産者」と自己反省的言説
Sub Title	A second kind of producer' and self reflective discourse in Japan's autobiographical writings practice
Author	小林, 多寿子(Kobayashi, Tazuko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2017
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.90, No.1 (2017. 1) ,p.476(67)- 494(49)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	有末賢教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20170128-0476

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本の自分史実践における 「第二の生産者」と自己反省的言説

小 林 多 寿 子

1. 日本における自分史と文章運動
2. 自分史を書くことと「第二の生産者」
3. 人生史サークル黄檗の会
4. 書くことへの転機と意味の転換
5. 自分史と「第二の生産者」

1. 日本における自分史と文章運動

日本では大正初め以来、自己のライフ〔人生あるいは生活〕を書くことは社会運動としてなにか隆盛がみられてきた。戦前期の生活綴方運動は子どもたちに日常生活を綴方（作文）にあらわすことを推奨した文章運動であった。1950年代に盛んになった生活記録運動は、日常生活に加えて、「母の歴史」や自己の生いたちに目を向けて書くことが薦められた大人の文章運動であった¹⁾。1968年に始まった「ふだん記」運動は、八王子における橋本義夫と色川大吉との親しい関係から、「自分史」という言葉の創出に深く関わり²⁾、1980年代半ばから90年代にかけて顕著になった自分史ブームの先駆けとなった。一世紀以上にわたって続いてきた自己のライフを自己自身が書く文章運動の系譜、そしてその先にある現代の自分史。なぜこれほどに自己のライフが書かれてきたのだろうか。

自分史とは、人生の出来事を思い起こし、歩んできた道をふりかえり、書き綴ったものである。本稿では、おもに自分史という言葉を使うが、自伝、人生史、人生のストーリー、ライフストーリー、ライフヒストリー等の言葉

で表現されるものと互換的に用いている。つまり、自分史は、自伝、人生史、ふだん記、生活記録などさまざまな名称で言いあらわされる自己の経験や人生が書き綴られたものを包括し、個人が自身であらわす「自伝的書きもの autobiographical writings」としてとらえている。

自分史は、生いたちから現在にいたるまでの人生全体をあらわしたものでなく、子ども時代の思い出や青春記、戦争体験など人生の一時期に特化したものもすくなくない。どの時期であれ、そしてどれほどの期間であれ、自己の経験と自己の歴史が書きあらわされたものをひろく自分史ととらえている。昨今、表現形式は、時系列的に書き綴られたものだけでなく、俳句や短歌を織りこんだり、エンディングノートの一部に組み込んだり、写真を多用したり、動画の編集であったりと多彩になっている。それでもなお自分史は文章で書きあらわすことが主であろう。

近年になってインターネット上で自分史クラブサイトが開かれたり、ブログやフェイスブックで自分史が綴られたり、自分史を書くためのインターネットによるサポートビジネスが展開されたりするようになった。このような動きは、個人で自分史を書くことを可能にする2000年代以降の新しい動向である。2010年代後半の現在、自分史を書く動きは、たとえば自分史フェスティバルの開催、あるいは地域での聞き書きによる自分史などの形で再興しており、これまでになかった自分史の動きもみられる³⁾。なにがいまもなお自分史を書くことをうながしているのだろうか。

2. 自分史を書くことと「第二の生産者」

自分史を書くことにどのような魅力があるのかと筆者はこれまで問うてきた⁴⁾。たとえば、「人生の再吟味」やアイデンティティワークとしての魅力があげられる。D・ブラスは『日本人の生き方』のなかで、人生を語ることで「人生の再吟味」に魅了された人たちを紹介している（ブラス、1985：42-44）。「人生の再吟味」というライフレビューによって過去の経験は意味をあたえられ、過去の＜私＞と現在の＜私＞がつながり、自身の言葉で表現できたとき、自己の人生に対して主体的な視点が得られる。この主体

的な視点をとおして自己がなにものであったかを確認することはアイデンティティワークである。過去の自己を書くという行為は、過去を現在へひきよせ、ストーリーに組み立てていくことであり、その行為をとおして自己とはなにかを確かめることになる。だから自分史を書くことがアイデンティティワークとなる。自己のストーリーをもつことによってえられた自己理解は現在の自己を肯定する作用としてはたらくだろう。

さらに、自分史を書くという行為は、このような自己へ向かうベクトルとともに、自己のストーリーを作品にすることで他者へ向かうベクトルもあわせもつ。自己の人生の物語が読書されるという想定は、身近な他者そして未来のだれかへ自己の経験が伝達され継承されていくことの想像力ともなる。自分史を書くことは自己の経験が世代的に継承される可能性を開くことになる。

人生の再吟味、アイデンティティワークとして自己のストーリーを書くこと、世代継承の可能性など、ここであげたのは、自分史を書くことによってみいだされる魅力である。ただ、書くことでえられるかもしれない成果がたとえ予想されたとしても必ずしもだれでも書けるわけではない。書くリテラシーが十分に備わっていてもすぐに書けるわけではない。自分史を書くことをながに推し進めるのか。

自分史を書く系譜をたどるなかで注目されるのが、日本における自分史の特徴として一貫してみられる「ともに書く」という書き方のスタイルである⁵⁾。「ともに書く」スタイルとは、自分史講座やサークルなどのような形で書く集団をつくり、自分史を複数の人たちで一緒に書く実践を指している。定期的に集まる機会を設け、短い文章を書いて持ち寄り、少しずつ書きためて、文集にまとめる。一冊の自伝的作品として本にする人もある。

このような「ともに書く」スタイルで自分史をあらわすことを支えているのが自分史講座の講師やアドバイザーをつとめる自分史の指導的立場にある人たちである。日本では、自伝／自分史を書くことにおいて制度的な専門家はいない。かれらは⁶⁾、長年にわたり自分史を指導するノンフォーマル・セミプロフェッショナルとして「第二の生産者 a second kind of producer」(Plummer, 1995: 21/ プラマー、1998 : 41-42) の役割をはたしている。

「第二の生産者」とは、イギリスの社会学者 K・プラマーがセクシャルストーリーの顕在化を論じた際に指摘したストーリーの産出をうながす媒介者（ファシリテーター facilitator）のことである。プラマーは、誘導者（coaxers）、コーチ（coachers）、強制者（coercers）ともいわれ、聞き手と質問者になってストーリーを誘い出すことに携わり、「一瞬の間があれば、人びとからストーリーを引き出す力」をもっている人たちのことを「第二の生産者」として論じている（1995: 21-22/1998: 41-43）。ときにセラピスト、テレビのインタビュアー、法廷の尋問者、医者、タブロイド紙の記者、そして社会学者さえもストーリーを語らせることに関わる人たちとしてあげられている。自分史を書くことをめぐる社会現象では、人生のストーリーを書くことを促し、自分史を産出する媒介者を「第二の生産者」として重視したい。

自分史の産出を媒介するかれらの本職は、たとえば脚本家、作家、国文学者、学校教師、新聞記者、編集者などである。かれらは、書くことに関連する職業に携わってえた多様な知識やスキルを含むプロフェッショナル・キャリアを自分史の指導に援用している。かれらは書くことの国語的知識や印刷製本のスキルに習熟しているというプロフェッショナル・キャリアによって自分史を書くことの指導を依頼されたり、自分史講座を受け持つようになったりしている。しかしながら、実際の現場ではそのようなキャリアよりもかれらの自己反省的言説（self-reflective discourse）のほうがむしろ書くことをうながす潜在的な力をもっているのではないかと考えられるいくつかの事例にであって来た⁷⁾。ときに同じ時代を生きる市民としてあるいは人生の苦難を乗り越えてきた人間としてのかれらの自己反省的言説がプロフェッショナル・キャリア以上に自分史の生産を促進させる力を発揮している。その状況の特徴を一つの自分史サークルで講師をつとめた一人の大学教授へのインタビューをもとに、自伝的語りにおける自己反省的言説をとらえながら検討したい。本稿は、自分史を書くことに関わる媒介者というセミ・プロフェッショナルな人たちの自己反省的言説がはたしている役割についてインタビュー・ナラティヴをとおして考察し、なにが自分史を書くことをうながしているのかを考える手がかりとしたい⁸⁾。

3. 人生史サークル^{こうろ}黄檫の会

人生史サークル黄檫の会〔以下、黄檫の会もしくはサークルとする〕は、福岡県南部⁹⁾で1997年に約200人のメンバーでつくられた自分史を書くグループである。ほぼ毎月1回、自分史講座を開いて顔を合わせ、文章を書いて1年に3冊の文集を定期刊行してきた。メンバーのなかには個人の単行本を出している人もある(2015年現在24冊)¹⁰⁾。

このサークルに注目したのは、福岡県南部の八女という一つの地域に根ざして立ちあがった自主的、自発的な文章運動であり、会則を定め、会費を徴収して定期的に自分史文集を刊行する会を運営するシステムを築いて、約20年続いている点にある。行政やカルチャーセンター主催の自分史教室が目立つなかで、黄檫の会の設立経緯とその後の運営における自発性と自主性、創造性を重視したい。このサークルのもう一つの特徴は、自分史図書館をもっていることであり、他の自分史サークルにはない独自の点である。自分史図書館は、2005年に開設された小さな私設図書館であるが、自分史や郷土誌、歌集句集などを中心に約2700冊所蔵している。その多くが少数部印刷の自費出版で流通ルートに乗らない希少な作品であり、地域を基盤としたライフストーリー・アーカイヴとしてみると興味深い。加えて、黄檫の会が「ともに書く実践」を長く持続させたことで「書く共同体」として成長してきたことも重要である。「書く共同体」は「ともに書く」という共同体的な書き方を実践する場であり、発表機関を共有して書く行為を継続していることで生成されていく¹¹⁾。筆者は、2009年からサークルの関係者へのインタビューや会合への参与観察を中心とする調査をおこなってきた。黄檫の会がいかに「書く共同体」として成長してきたのかを考えると、注目したいのが1997年に黄檫の会がはじまって以来、16年にわたって自分史講座の講師をつとめてきた国文学者の安保博史(以下、本文中では敬称略)である¹²⁾。

安保は、近世文学を専門とし、地元の大学で国文学を教えていた。大学の同僚の伝手^{つて}で頼まれて、自分史講座の講師を引き受け、16年にわたり自分史を書くことを指導してきた。黄檫の会にとって安保は、たんに文法や構成のしかた、主題の決め方など文章の書き方全般の指導をただけでなく、60

代、70代が大半を占めるサークルメンバーに、人生を照らし、いかにとらえなおすかという人生の書き方とその視点を教示し、自分史を書くことへの推進者となった人である。安保へのインタビューをもとにその語りを引用しながらどのように自分史の媒介者となっていったのかをとらえてみよう。

安保は、当初、自分史講座で、まず、原稿用紙の使い方、句読点の打ち方、構成の展開のしかた、推敲のしかたなど文章を書くスキルを教えた。しかし、文章指導だけの講座は3、4回で十分であった。

「人生をどうとらえますかとか、戦後の青春をどう照らしだしますかとか、自分を照らしだすには具体的な切り口が必要ですので、たとえばモノを通して照らしだしてみようということで、そのお手本として、昭和の記憶を記す名手であった向田邦子の随筆を読んで学んでみようなどとああでもない、こうでもない、みんなで4、5年、勉強しあったわけです」¹³⁾

黄檭の会がはじまって4年目くらいには、文章テクニックの指導よりも人生をテーマにした作家や詩人などの作品の講読をとおして、人生をどのように再評価し、人生をいかに楽しんでいったらいいのかという主題へ重点が移っていった。

「もう文章執筆のテクニックではなくて、自分の言葉を通して自分の人生を耕して磨いて、マイナスの人生をどうプラスに転換していけばいいか、作家たちはマイナスの人生を、言葉を通してプラスに転換して、自らを救済していった人が多いようだが、それは僕ら庶民の言葉の営みにも応用できるのではないかなんていうふうに考え」ました。

安保によると、このころには「文学や言葉、自分史を通した生きがいの再創造」が黄檭の会のテーマとなっていく。自分史講座は、「人生を耕す視点」で詩や俳句、文学を読み、書くことで人生をとらえなおすための勉強の場になっていった。

安保が黄檭の会の講師となったのは40歳になる直前であった。20歳以上

も年長の人たちに対して指導する立場になるのは容易なことではなかった。大学での教育と国文学の研究を抱えながらも、生活のなかで 3 分の 1 以上の比重を占めるほど、毎回、自分史講座の準備に全力を尽くしたという。

4. 書くことへの転機と意味の転換

1) 三つの転機

安保が 16 年間、自分史講座講師をつづけたなかで、年 3 回刊行される文集は 47 回を数え、個人の単行本は 20 冊以上、出版されるまでになった。書くことの素人であったメンバーを自分史が書けるように導いたことで安保は多大な功績があった。しかし、文法や書き方の指導によって書けるようになったわけではない。安保の語りによると、黄檮の会において書くことを促した契機として三つの転機があったことがわかる。

一つめの転機は、黄檮の会での自分史講座がはじまって 1 年たったころに新聞に載っていた「キミ子さんの話」という記事¹⁴⁾を自分史講座でのテキストとしてとりあげたことにある。「キミ子さんの話」とは、脳梗塞のために病院で寝たきりとなっていた 85 歳の女性の話である。キミ子さんは筑豊の炭坑で働く両親とともに 5 歳のときから石炭を掘る「少女坑夫」であった。貧困のため小学校に行かせてもらえず、文字を習得できなかった。80 歳になって一念発起してペン習字教室へ通い、文字を獲得して、日めくり暦の裏に自分の「生」を書きはじめた。キミ子さんは、両親と炭坑で働いていたとき、闇のなか母が照らすカンテラの灯りでほんとに安心した話、紡績工場の入社試験で名前が書けないときに手を添えて助けてくれた先生に涙した話を書いて、30 枚になったところで病に倒れた。その手記は 17 歳のところで途切れてしまった。これが「キミ子さんの話」であった。黄檮の会でこの話を紹介したところ、大きな反響があった。とくに 80 歳で文字を習得し人生を書いたという点を「言葉による救い」の可能性が示されたものとして安保はとらえている。

安保は、「キミ子さんの話」が黄檮の会にとって一つの啓示になったという。

「キミ子さんは自分の人生の、明るい部分といいますか、生まれてよかったということを書いて、自分自身を納得させて死にたいとおもったとおもうんですよ。ライフヒストリーを自ら文字に記して、生まれてよかったなと心に刻みたい、そういう思いがきっとキミ子さんを支えたとおもうんです」

安保の解釈では、キミ子さんが自分のライフヒストリーを自ら文字で記して、自分の人生の明るい部分を書こうとしたのは自分自身を納得させて死にたいとおもったからに違いない。初めて文字を学んだのが80歳で、闇のような人生のなかで光のような部分を書いたという話が、黄檭の会のメンバーには記憶をたどって書いてみることをうながす刺激となった。

二つめの転機は、サークルが立ち上がって数年たったころ、70代の女性会員が母のことを赤裸々に描いたことにあった。母は貧困ゆえに読み書きを学べなかった。母は、夫が早く亡くなり、8人の子供を一人で育てるために貧困のなかで壮絶に働かざるをえなかった。この母の人生の遍歴を描いて、その後、本にまとめたのである。メンバーの一人が率直に母の人生を書いたことで、他のメンバーは安心して自分自身の困難な経験を語りだすきっかけをえたのではないかという。

三つめの転機は、安保自身が書いてサークルの文集に載せた短いエッセイにある。そこに記されたのは、20歳の安保が直面した人生の困難であった。父の事業失敗による借財のために大学生の身ながら複数のアルバイトを掛け持ちして親へ送金するという苦難が10年も続き、悲憤の日々を送ったという告白であった。

この三つめの転機は、自分史講座講師となって2年後に書きあらわした安保自身の人生の苦難の話であったが、安保を人生のストーリーの媒介者としてより積極的に推し進める新たな転機となった。彼自身が変わることで、人生を書くことがそれまでにない新しい意味をもたらす契機となった。さらに黄檭の会が人生を書く場として持続されていく推進要因となった。つまり持続的に書き続けられていくなかで生じたのが書くことによる「意味の転換」である。

2) 意味の転換

書くことによる意味の転換とは、人生の経験、とりわけ苦難の経験に対して付与された意味が否定的なものから肯定的なものへ変化することを指している。安保があげたのは、マイナスからプラスへ、縛りから解放へ、恥から救いへという三つの意味の転換である。

たとえば離婚とシングルマザーでの子育て、家業の倒産、父の戦死と戦後の生活苦、長期にわたる親の介護や家族の看護、このような人生の困難や労苦の経験をメンバーたちは書いてきた。書くことでそのような事実が消えるわけではない。だが、苦労や困難として負の意味を付与されていたことを自分の言葉で書くことによって、それを正の意味に自ら転換することができる。書くことによって正の意味に転換されるとき、書いた人はその負の縛りから解放される。

「書いたり話したりすると、その縛りから解放される。安心できる相手ですから、みんなもう長年連れ添ってきた仲間ですから、侮蔑されたり仲間からはずされたりすることは絶対ない集団ですから、人生のマイナス要因をどんどん話し、表現し、文に書ける。書くことで、恥ずかしいとおもってきたことで縛られていた負の鎖から自らを解放するという方が大勢おられた」

自己の人生を書くことによってマイナスの人生をプラスに転換する、縛られていた鎖から自らを解放し、救済することになったという。書くことで新たな解釈でとらえなおしたことは、人生を再評価する契機になった。このような意味の転換が可能になったのは、黄檮の会が長く互いの信頼感を培い、安心できる仲間集団となっていたことにある。

「傾聴してくれる仲間がいてくれるよさが黄檮にはあるとおもうんですよ。文章のヘタウマを評するのではなく、受け止めてくれて、ともに意味をあたえてくれるような仲間づくりができている面がある、それが黄檮のよさだとおもいました」

黄檮の会は、傾聴してくれる仲間、受け止めてくれ、ともに意味を考えてくれる仲間がいるコミュニティとなっていた。そのコミュニティのなかでマイナス要因を書き話すことで縛られていた鎖から自らを解放したという人が何人もいた。このコミュニティこそ「書く共同体」である。

3) 互恵的な媒介者へ

安保があらわした青年期の苦難、負債との苦闘という人生の困難を書いたことが逆に彼が自分史を指導するうえでより信頼される講師となっていくことの転機となった。安保自身が自己のマイナス要因を話すことで、メンバーはより書きやすくなったという点で自分史を書くことの助けになり、促進作用として働いた。

安保自身にとっては、黄檮の会において、メンバーが書くことを助けているようで、自己自身が潤ったり、励まされたり、ときに元気づけられたという。この状態を互恵的關係と安保はとらえている。

「僕自身の流転の人生歴のなかで、マイナス要因の傷をどう癒して、自らを支えて、家族を維持していくのかについては痛切なものがある。上から教えるんじゃなくて、相互に学びあって、私も元気になりたいという部分がありますね」

人生のマイナス要因で生まれた傷を癒し、自己を支え、家族を維持していくことは自己自身にとって痛切な問題であり、自身が元気になりたいという思いが強かったのである。このような互恵的な媒介者になりえたことが結果として、多くの自分史が書かれることをうながし、そして16年にわたって講師を継続できたのであった。

「私自身が、いろいろ起伏の多い人生でした。Helping you helps me. といいますか、このようにみなさんに学びの機会を与えてお助けしながら、自分自身も潤ったり、励まされたり、ときには元気づけられたりする面がありますから、互恵的、助け合いの關係があるから、いまがあるんだなって。……互恵的な關係、

Helping you helps me. 的な関係が自分史サークルやライフヒストリーの執筆の場においてないと、お仲間として 10 年以上やっていくことは無理なんじゃないかとかのごろしみじみおもいますね」

講師の立場の安保にとって黄檗の会は、「私を磨いて耕して成長させてくれた場でもあった」とおもうと語っている。「自分が励まされている、教える側も教えられる側も、学ぶ側も、ともに互恵的な関係ができていく」という。互恵的な関係を「Helping you helps me」的な関係と言い換えながら、自分史サークルというライフヒストリーを執筆する場にこのような関係が形成されていないと、仲間として 10 年以上やっていくことは無理ではないかと述べている。この互恵的な関係の生成は、16 年間、自分史講師をつとめた到達点であった。

5. 自分史と「第二の生産者」

1) さまざまな「第二の生産者たち」

自分史を書くことは、人生の過去の出来事をなにかの糸でつないで意味あるものにしていく行為である。あるいはすでに付与していた意味とは異なる意味の糸でつなぎなおしていく行為でもある。その際に、新しい意味の糸でつなぐことを媒介し表出することをうながし、人生のストーリーをうみだす役割をはたす「第二の生産者」の存在は重要である。日本の自分史ブームあるいはライフを綴る文章運動のなかで、プラマーのいう「第二の生産者」、つまり人生のストーリーの媒介者としてとらえうる人たちが自分史グループのリーダーや指導者のなかに数多くみいだされる。

文章運動の系譜をたどると、いくつかのタイプの媒介者が認められるだろう。たとえば、生活綴方運動で子どもたちが日常を綴ることを指導した小学校教師たちは学校教育においてその役割をはたした。1950 年代の生活記録運動では、たとえば四日市で紡績女工の職場のサークル活動のなかで生活記録を書くことをすすめた澤井余志郎はその中核的な媒介者であった¹⁵⁾。1951 年に『山びこ学校』を出した無着成恭は山元中学校の生徒だけでなく、

紡績女工たちをはじめとして、当時の生活記録を書く人たちにとって重要な媒介者となって、全国的生活記録運動の展開に大きな影響をあたえた¹⁶⁾。これらの人たちは学校教育やサークル活動など集合的な場を生かした「第二の生産者」たちであった。

1960年代から1985年に亡くなるまで「ふだん記」運動の主導者であった橋本義夫もまた全国に広がった「ふだん記」を生みだした媒介者の代表的な一人として位置づけられる。既存の組織ではなく、八王子において自らの周囲の人たちによびかけて「ふだん記」を書く人たちが広がり、「ふだん記」グループができていった。橋本は、書く場、書く機会そのものをつくりだし、「書く思想」¹⁷⁾を唱えて書くことを促した媒介者であった。そして自らも多くの自分史的作品をあらわしている。そのなかには戦中期の投獄体験も含め人生前半で味わった負の体験が書き綴られている¹⁸⁾。

橋本義夫の「書く思想」に感化されて自分史を書くようになり、やがて自分史講座の講師となった人に鈴木政子がいる。鈴木は、敗戦後、10歳で家族とともに満州から引き揚げの際の過酷な体験を戦後35年経て書きあらわすことができた¹⁹⁾。書くことへのきっかけは「ふだん記」運動との関わりでえている。鈴木は、大学卒業後出版社に勤め、編集者として本づくりの仕事に携わったが、自らの体験は書けないままであった。「ふだん記」運動との出会いで書く場をえて、満州で幼い弟妹を四人も失った過酷な引き揚げ体験を書くことができた。極寒の満州での熾烈な体験と収容所で亡くなった弟への罪の意識を書いたことで鈴木は変わった。自らが書いたことで書くことを指導する立場へ転換できたのである。鈴木は元新聞記者の友人に言われたことを引き合いに出しながら、つぎのように語っている。

「鈴木さんの自分史講座がみんなに好かれるのは、わたしが生と死の境をくぐり抜けていること、だから人の痛みがわかること、それが読みとれること、それじゃないのって書いていました。そうかもしれません。そうであるとする、わたしは『あの日夕焼け』に書いたあの体験から、たくさんのことを学んだっていうか、いただいているんだなあっておもうんです」²⁰⁾（小林、1998：29）

鈴木が書いた苦難に満ちた負の体験は、書くことで書いた人自身にとって自己理解の資源となっている。さらに彼女自身が書くことを励ます側へ転換する契機となり、自分史を書くことを促進する作用となった。ここにもまた相互循環的な作用をはたしている自分史を書くことの実践と自己反省的言説の一つの事例をあげることができる。

2) 今後の自分史実践へ——相互性と「言葉による救済」

本稿は、自分史を書くことに関わる媒介者というセミ・プロフェッショナルな人たちの自己反省的言説がはたしている役割について、黄櫨の会の事例でえた安保の語りをとおして考えることをめざしていた。自分史が書かれる促進要因は複合的な観点からみていくことが求められ、今後、さらにこの問題関心のもとに継続的に探究していきたい。ここで安保の語りからみいだされたことを小括しておこう。

黄櫨の会の安保や他の例からわかることは、媒介者には二つの準拠点があることだ。一つは、書くことの専門的キャリア——国文学者、編集者、学校教師など——として備えている書くことに関わる知識やスキルや経験のような、書くことをめぐる専門的キャリアが媒介者としての基本的な準拠点になる。だが、それだけではない。もう一つ、人生のキャリアもまた準拠点として重要である。媒介者たちは世代も性別も出身も多様なキャリアをもっている。さまざまなキャリアのなかで、他者の人生のストーリーの表出をうながすことに作用するのが、失敗や逆風、挫折や苦労のようなライフコース上の困難あるいは受難の体験であり、その体験の語りや乗り越え方の語りである。人生のキャリア、とくにこのような負の体験とその表現がもう一つの準拠点になっている。個人的な人生のキャリアとしての負の体験は、その体験が表現されることによって参照の準拠点を提供して、他者の自分史を産出することに働きかけている。媒介者自身が自伝的な語りとして表現する自己反省的言説、とりわけ負の体験の語りは、自伝的な書く実践にとっての産出促進のプロフェッショナル・リソース、つまりプロとしての資源となっている。

しかし、安保の語りからわかるように、人生のキャリアとしての負の体験が語られるだけで産出が促進されるわけではない。互惠の関係という言葉で

表現された相互性は重要な鍵である。互恵的関係とは、関係する当事者がたがいにより（for mutual benefit）関係であり、一方向で影響をおよぼすのではなく、双方向的に影響しあう関係である。書くことによる意味の転換としてあげた、マイナスからプラスへ、縛りから解放へ、恥から救いへという付与された意味の変化は、自分史を書く人たちが獲得するのではない。安保自身、つまり媒介者自身もまたその変化を享受しており、その点で互恵的である。この互恵的という相互性の構築が自伝的な書く実践をめぐる要点となっている。この相互性は、長く継続される「書く共同体」のなかで醸成されるものであり、この醸成のプロセスでは書く人と媒介者とのあいだで築かれる信頼関係が基盤となっている。この信頼関係を安保はつぎのように語っている。

「僕の場合はみんなの一編一編を読みながら、少しずつ一人ひとりの記憶を積み重ねて、その記憶の蓄積のもとに会員の方々と吞んだり話したり、文章執筆なんかについて確認しあったりしています。この信頼関係が黄檗の会の一つの特徴かなとおもっています」

このような信頼関係を基盤とした相互性のある「書く共同体」が構築されたからこそ豊かな「書く実践」が可能になったのである。では、このような「書く共同体」が今後も持続されうるのか、あるいはあらたな構築は可能なのかという問いが浮上する。安保は、書くことで救われることがあるかどうかという「言葉による救済」の問題が鍵になることを示唆している。たとえば戦争体験のない戦後世代には書くことがないのではないかという問いが投げかけられたことがあった。それに対して、個々人に戦争に似た体験がありうるのではないかと応答したという。書くことはたくさんあるのではないか、「言葉による救済」を必要としている体験があるのではないかと述べている。

「戦争体験以外にも、書くことはいっぱいあるわけで、つまり、個人個人の戦争に似たような体験、さまざまな倒産とか自殺とか、いじめとか、さまざまな

家族の苦難とか、自分自身の煩悶とか、いろいろな問題があるんですね。それを書くことで救われるというか、書くことで元気づけられるという面があります」

自分史実践という自己について書く営みを複合的に考えていくなかで、「互恵的關係」と「言葉による救済」という二点は今後の「書く実践」を考えるキーワードとして注目していきたいとおもう。

- 1) 1950年代の生活記録運動に深い関わりをもった「媒介者」の一人であった鶴見和子は、「生活記録運動を戦後でできた、おとなの生活つづり方運動」とした国分一太郎の『生活綴方ノートⅡ』1955をふまえて「おとなの生活記録運動」として論じている(鶴見、1963)、(鶴見、1998)。生活記録運動への社会学的視点については、2007年におこなった四日市の東亜紡織泊工場の生活記録運動関係者へのインタビュー調査を中心にまとめた『ライフストーリー論からみる1950年代の生活記録運動とリテラシー変容の経験的研究』(小林多寿子、平成17~19年度科研費成果報告書、2008年6月)にもとづいている。
- 2) 橋本義夫と色川大吉についてはつぎの箇所で論じている。小林、1997: 42-53、および色川、1975参照。なお、2012年5月12日におこなった色川大吉さんへのインタビューで詳しく伺っている。
- 3) 愛知県春日井市は、日本自分史センターを設立して、自分史作品を積極的に収集し所蔵しているほか、自分史講座の開講や自分史掌編の公募など自分史事業に力を入れている。春日井市の自分史の状況については、小林、2013参照。また、東京では、自分史活用推進協議会が2013年から毎年夏に自分史フェスティバルを開催している。
- 4) 小林多寿子、2011参照。
- 5) 「ともに書く自分史」については、「第1章 ともに書く自分史」(小林、1997: 17-52)参照。
- 6) 「かれら」という表現について、指導的立場にある人は女性も多いが、本稿では英語の they /their/them にあたる人称代名詞を「かれら」と記し、ジェンダーレスで使用している。
- 7) 1990年代の自分史ブームや「ふだん記」運動、生活記録運動の調査研究をとおしてえられた知見である。
- 8) 本稿の着想は、国際社会学会第3回社会学フォーラム(2016年7月9-14日、

ウィーン大学にて開催) RC38 Biography and Society のセッションの一つとして提起されたテーマとその概要に触発されて、そのセッションで短い報告をしたことをもとにしている。このテーマのオーガナイザーは、ドイツのゲルハート・リーマン Gerhard Riemann とリナ・イノオロッキ Lena Inowlocki であった。セッション・テーマは、「プロフェッショナル言説と自己反省についての自伝的ワークナラティブの再構築的分析の利用について On the Uses of the Reconstructive Analysis of Autobiographical and Work Narratives for Professional Discourse and Self-Reflection」である。提起されたテーマ概要は、本稿の着想の契機となっているので、すこし長くなるが全文を引用する（邦訳は筆者による）。

「The dynamics of sociological biographical research partially derive from an ongoing interest in biographical studies within the professions, e.g., social work, teaching, and psychosocial health care. In professional schools there has been a growing awareness that becoming familiar with biographical research can contribute to a strong foundation of (future) professionals' practical case analyses. There have also been new styles of reconstructive research and self-reflection within the professions, which are of interest for biographical research in general. It is important for us to stay sensitised to such developments and practical uses. The interdisciplinary and interprofessional character of biographical research has always been a hallmark of our joint project. The session will provide the chance to present and discuss innovative work, which can contribute to professional self-reflection, professional discourse and the voicing of professional perspectives and experiences in public debates. It will be possible to discuss, e.g., the analysis of professionals' spontaneous work narratives and its practical uses, the self-reflective ethnographic study of one's own practice, and other developments in professional research. Colleagues from different countries, disciplines and professions are invited to participate and to share their experiences. The chances of such developments should be explored but also problems and structural restrictions. たとえばソーシャルワークや教えること、心理社会的ヘルスケアなどのような職業のなかでバイオグラフィカル研究についてのいまの関心から社会学的なバイオグラフィカル研究のダイナミクスがひきだされている。専門的な教育の場では、専門家の実践的な事例分析の強力な基盤に貢献できるような、バイオグラフィカル研究に慣れ親しむ意識が増大してきた。専門職のなかでも、一般的にバイオグラフィカルに関心を持つ再構築的研究と自己

反省の新たなスタイルもあった。そのような発展と実践的な利用に敏感であることは私たちにとっては重要である。バイオグラフィカル研究の学際的で複数のプロフェッショナル間をまたぐ特徴はいつも私たちの共同プロジェクトの目印であった。このセッションは革新的な仕事を紹介し議論する機会を提供することでプロフェッショナルの自己反省、プロフェッショナルの言説、そしてプロフェッショナルの視角と経験の声を公共の議論に資することになるだろう。たとえば、自発的なワークナラティブとその実践的利用の分析、ある人自身の実践の自己反省的エスノグラフィ的な研究、プロフェッショナルの研究における発展などを議論することができるだろう。さまざまな国、学問領域、職業からくる人たちが参加し、それらの経験を共有することに招待される。そのような発展の機会、問題、構造的制約が探求されるべきである。」

国際社会学会 ISA の RC38「Biography & Society」はライフストーリー（ドイツ圏ではバイオグラフィという言葉がより多く使われる）の社会学的研究に取り組むコミッティであるが、とくにこのセッションは、プロフェッショナルの言説、自己反省的言説をとらえるのに、自伝的ナラティブとワークナラティブの二つに着目して検討する方法をなげかけており、その点は新しい視角として評価される。2016 年 7 月 12 日におこなわれたセッションでは、ドイツ、オーストリア、ギリシア、日本から計 7 つの報告があった。筆者は「Voices and Self-Reflective Discourse of Facilitators Involved in Japan's Autobiographical Movement」というタイトルで報告している。

- 9) 福岡県南部とは、八女市、筑後市、広川町を中心とする地域であり、2016 年現在のこの地域全体の人口は約 13 万人である。
- 10) 筆者は人生史サークル黄檗の会に注目して 2009 年から調査を開始している。調査には黄檗の会を創設した末安良行さんや運営に携わるたくさんの方々のご協力をいただきました。記して感謝いたします。
- 11) 「書く共同体」については、「ふだん記」運動を論じた際に、「読者共同体」という概念に着想をえてつくりだした概念である（小林、1998）。
- 12) 本稿のもとになった安保博史先生へのインタビューは 2011 年 3 月 27 日におこなっている。安保先生には、黄檗の会の関係者へのインタビューや会合の参与観察についてご支援いただき、インタビューにご協力いただきました。心より深謝いたします。
- 13) 本文中の「」は、インタビューでの語りからの引用である。
- 14) 「カンテラ「少女坑夫」時代の記憶（「三池」それから：2）」朝日新聞西部本社版、1998 年 3 月 13 日朝刊、29 頁。

- 15) 鶴見和子は、『澤井余志郎さんと生活記録』（初出 1984 年、1998：582-590）で、澤井と四日市・東亜紡織泊工場で生活記録をはじめた伊那谷出身の女性労働者たちとの関係について論じている。筆者は、2008 年 3 月 4 日、澤井余志郎さんへのインタビューで当時の話を伺っている。
- 16) 『山びこ学校』が与えたインパクトがいかに大きかったかについては東亜紡織泊工場の生活記録運動を担った元・女性労働者たちが筆者とのインタビューで語っている。小林、2008、参照。
- 17) たとえば、橋本義夫の子息・橋本鋼二さんが編者となってまとめた本（『暴風雨の中で 橋本義夫著作集第 2 集 戦中戦後日記・手記』1996）には、戦中戦後の日記・手紙から戦前の青年期の厭世観、戦時中の拘置体験や八王子空襲によって経営していた書店や生家を失った体験等があらわにされている。
- 18) 橋本義夫の「書く思想」とは、一、書く人の立場を問わない、二、文章の巧拙を問わない、三、本の作成を薦めるという三つを要点としている。詳細は、小林、1997：45-50、および小林、1998：61-62、参照。
- 19) 鈴木政子については、小林、1998：42-45、および鈴木、1995：78-92、参照。
- 20) 鈴木政子さんへのインタビューは、1996 年 1 月 31 日におこなっている。小林、1997、参照。

参考引用文献

- 安保博史 1999『「杜子春」との出会い』（『黄檗』6 号、1999 年 7 月発行、215 頁）
- 安保博史 2009「自分史の可能性——記憶の「編集」と人生の再生」『群馬県立女子大学国文学研究』29 号、31-42 頁
- 橋本義夫 1996『暴風雨の中で 橋本義夫著作集第 2 集 戦中戦後日記・手記』
- 色川大吉 1975『ある昭和史——自分史の試み』中央公論社
- 小林多寿子 1997『物語られる「人生」——自分史を書くということ』学陽書房
- 小林多寿子 1998「書く実践と書く共同体の生成——初期「ふだん記」運動の場合」『生活学論叢』Vol.3、日本生活学会、59-70 頁
- 小林多寿子 2006「書く実践と自己のリテラシー——『ふだんぎ』という空間の成立」桜井厚編『戦後世相の経験史』せりか書房、240-261 頁
- 小林多寿子 2008『ライフストーリー論からみる 1950 年代の生活記録運動とリテラシー変容の経験的研究』（平成 17~19 年度科研費成果報告書、2008 年 6 月）
- 小林多寿子 2011「自分史——人生を書く」『いのちとライフコースの社会学』藤村正之編、弘文堂、125 頁
- 小林多寿子 2013「〈人生〉を書く、〈人生〉を語る——ライフストーリー実践の町

- から」『TASC MONTHLY』No.455, 2013.11 : 13-18 頁
- D・W・プラス 1985『日本人の生き方——現代における成熟のドラマ』(井上俊・杉野目康子訳) 岩波書店
- Plummer, K. 1995 *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*, London: Routledge. ケン・プラマー 1998『セクシャル・ストーリーの時代——語りのポリティクス』(桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳) 新曜社
- 鈴木政子 1980『あの日夕焼け——母さんの太平洋戦争』立風書房
- 鈴木政子 1995「「ふだん記」運動からの出発——自分史教室からのレポート」吉澤輝夫編『現代のエスプリ 自分史』338、至文堂、78-92 頁
- 鶴見和子 1963『生活記録運動のなかで』未来社
- 鶴見和子 1998「Ⅱ 生活記録運動」『コレクション鶴見和子曼荼羅 Ⅱ 人の巻——日本人のライフ・ヒストリー』藤原書店、307-638 頁